



## Kobe Shoin Women's University Repository

Title	ダンディ・偉人・聖書 (2) -ボードレールのダンディズム について— Dandy, Great Man, Saint (2)- On the Dandyism of Baudelaire
Author(s)	木谷 吉克 (Yoshikatsu Kitani)
Citation	研究紀要 (SHOIN REVIEW), 第三十二号 : 33-45
Issue Date	1990
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

# ダンディ 偉人 聖者 (2)

—— ボードレールのダンディズムについて ——

木 谷 吉 克

## 4 普遍的教養の人間

ダンディが自らの身を美しく装うのは、高貴で崇高な人間たろうとする心のひとつのあらわれであるということはすでに述べた。さらに、人間の高貴さ、偉大さというものは、ボードレールが「自然」と呼ぶところの、人間のなかの邪悪性、動物性を、理性や精神によって克服してゆくところにあるということについても述べた<sup>(40)</sup>。そこから次のようにもまた言うことができるだろう。つまり、ダンディが衣装の洗練、立ち居振る舞いの優雅を追求するのは、何よりも自らの内にある動物性を抑制し、覆い隠すためであると。少なくとも、ボードレールはダンディの背後にそのような動機を読みとった。低劣で邪悪、かつ醜悪な人間のもうひとつの本性を、何びとも免れることはできない。しかし、だからといって、ダンディは、これが人間の本来の姿であるとは考えない。人間にはたしかに、生来、動物性と呼ぶべき本性がそなわってはいるが、それとともに、精神性という、神的な本性もそなえている。人間は、意志的努力を怠って、無意志的、生理的、動物的な生を生きるなら、生涯自らの動物性から脱却することはできないだろう。そのような生は、人間の名に値する生とは言えないと、おそらくダンディは語るだろう。「人間の誇りのなかの最良のものを代表する者」たちであるダンディは、人間をもっと高く、はるかに高く位置づけるはずである。「俗悪なるものと闘ってこれを壊滅させようという欲求を代表する者」たちであるダンディは、まず自分の内にある邪悪なもの、俗悪なものと同わねばならない。ダンディは、「自然的な」生、ということつまり、生理的、生物学的、本能的、無意志的な生を越えて、徹頭徹尾、「精神的な」生、つ

まり、自覚的、意志的な生を生きようとする。

『赤裸の心』のなかの「＜ダンディ＞は絶えず崇高たらんと希求せねばならぬ。鏡を前にして生き、かつ眠らねばならぬ<sup>(41)</sup>」という言葉は、そのようなダンディの自覚的、意志的な生を語っているように思われる。

『現代生活の画家』のなかで、ボードレールは、ダンディズムを「ひとつの漠然たる制度、決闘と同じくらい奇妙な制度」と語り、「法律外の制度であるダンディズムは、峻厳なおきてを持っており、その権威に服する者はすべて、いかに血の気が多く、独立不羈の性格を持つ者であろうと、厳格な服従が要求される<sup>(42)</sup>」と述べているが、この峻厳なおきてとは、崇高で高貴たらんとするダンディが自らに課すおきて、自らの低次欲求に支配されることなく、逆に意志の力によってこれを支配し、制御してゆこうという強い決意を指すものであるだろう。

ボードレールは「ダンディズムは、ある点において、精神主義やストイシズムに境を接するものである<sup>(43)</sup>」と述べて、ダンディズムの精神主義的側面を特に強調する。この側面について、バルベール・ドールヴィリイはほとんど論じてはいない。そのみならず、おそらくブランメル自身も、このような精神性については、さほど意識してはいなかっただろう。とはいえ、たしかにそのような解釈は可能であり、ボードレールは、自らの思想に近づけて、ダンディズムのこの一面をより深化させたと言えるだろう。

齋藤磯雄は言っている。

「ボードレールもまた、常に事物の本質を把握するその透徹な眼光によって、俗眼にはただ、傲慢な洒落者、虚栄の怪物としか映らぬこの人物(ブランメル)の中に、智的アリストクラシイの近代的形式、墮落せる時代に於る精神的貴族の、新たなる存在方式を発見したのである。」

さらにこれに続けて、「ブランメル<sup>(44)</sup>の教義はボオドレールが之を把握するに及んで、異常に深刻な意味を帯びるに至った」と述べている。ボードレールのダンディズムとブランメル<sup>(44)</sup>のダンディズムは、どこがどう違っているのか。これはたしかに難しい問題である。というのも、ブランメルに関しては、さまざまなエピソードは残っているにせよ、かれ自身の深い内面をうかがい知ることの

できる資料は何も残されてはいないからである。それにまた、ボードレール自身、ブランメル個人についてはほとんど言及していないという事実がある。ただ次のことだけは言えるだろう。つまり、ボードレールは、ブランメルのダンディズムを内面化し、精神化したということであり、いわばダンディズムの深層を明らかにしたということである。いずれにせよ、齋藤磯雄が言うように、ボードレールによって、ダンディズムは以後「異常に深刻な意味を帯びるに至った」というのは、事実であるように思われる。ボードレールはたしかにダンディズムをより深化させたと言えるからである。

ところで、齋藤磯雄が使っている「精神的貴族」という言葉に関して、ここで少し考えてゆきたい。というのも、ダンディとは、この「精神的貴族」という呼称にふさわしい人間であるからである。ボードレール自身もまた次のように述べている。

「ダンディズムは、民主制がまだ全能となるにはいたらず、貴族制の動揺と失墜もまだ部分的でしかないような過渡期に、特にあらわれる。こうした時代の混乱の中であって、自分の階級からはみ出し、嫌気がさし、することもない人々、それでいていずれも生来の力をゆたかにもった何人かの人々が、一種の新しい貴族制を打ち建てようという計画をいadakることがあり得る。この貴族制がなかなか打ち破りがたいものであるのは、最も貴重な、最も破壊しがたい諸能力の上に基礎をおき、労働やお金の力では得られない天与の資質にもとづいているからである。<sup>(45)</sup>」

ダンディが打ち建てようとする貴族制は、生まれや財産にもとづくものではない。それは、「最も貴重な、最も破壊しがたい諸能力」に、また「天与の資質」にもとづくものである。そのような能力、そのような資質によって、他者とのあいだに差異を設けようとするわけである。それはもちろん美的感受性や趣味の卓越性といったものを指すだろうが、そればかりではなく、他者の心理やさまざまな状況を的確に読み取る洞察力といったものも指すであろう。事実、ボードレール自身、次のようにも言っている。

「なぜなら、ダンディという語には、洗練を尽くした性格と、この世界の精神的機構全体にたいする精妙な理解とが含まれているからである。<sup>(46)</sup>」

ボードレールは『現代生活の画家』のなかで、画家のコンスタンタン・ギイを「芸術家」というよりも「世間人」(homme du monde)だと語り、この「世間人」を、「世間を理解し、世間のあらゆる慣用の神秘的で正当な理由を理解する人<sup>(47)</sup>」と定義している。一方、「世間人」に対立させられた「芸術家」(ただし、ここでいう「芸術家」とは、ごく狭い意味での「芸術家」であるという留保がつけられている)は、狭い分野にしばられた「専門家」であると述べている。そこから、ボードレールは、コンスタンタン・ギイを、いわゆる「世間人」と相通じるころのある「ダンディ」と呼びたいと述べ、先程引用した一節へといたるわけである。この「専門家」と「普遍的教養の持ち主」とのあいだの対比は、「文明人」と「未開人」の比較のなかにもあらわれていたモチーフであり、かぎりなく小さな専門領域にとじこめられている「文明人」にたいして、ボードレールが「未開人」の「百科事典的教養」を称揚していたことはすでに述べた。

ボードレールのこうした考え方は、かれの批評作品のなかにも、さまざまな形であらわれてくる。ボードレールにとって、真に偉大の名に値する作家は、専門家の作家ではもちろんなく、普遍的な知識を有する作家である。シャンフルーリの『短編小説集』の書評のなかで、ボードレールはバルザックに触れて次のように言っている。

「実際、バルザックは、小説家であると同時に学者であり、発明家であると同時に観察家である。思想の生成と可視の存在の生成の法則とを等しく知っている博物学者である。かれは、言葉の最も強い意味における偉人である。<sup>(48)</sup>」

同様に、『1859年のサロン』では、現代の芸術家たちの凡庸、卑小、質の低下にたいし、過去の芸術家の偉大に思いをはせて、次のように語っている。

「かつて芸術家とは(例えば、ルブランとかダヴィッドであるが)いったい何であったか? ルブランは、博識と、想像力と、過去の知識と、偉大なものへの愛であった。ダヴィッド、つまらぬ小人どもに侮辱されたこの巨人もまた、過去への愛と、博識と結びついた偉大なものへの愛ではなかったか?<sup>(49)</sup>」

さらに、そのダンディ趣味が、早くからボードレールの注意を惹いていたドラクロワについても、ボードレールは「普遍的教養の人間」<sup>(50)</sup>(un homme d'édu-

cation générale) であったと語っている。

「この世界の精神的機構全体にたいする精妙な理解」や「普遍的教養」は、したがって、ダンディの必須の条件なのである。これを欠いたダンディなど、もはやダンディの名に値しない単なる洒落者にすぎないだろう。ダンディとは、すぐれて知的な人間なのである。『赤裸の心』のなかの次の断章が、以上の考察を要約してくれるだろう。

「ダンディズム

すぐれた人間とは何か？

それは専門家ではない。

それは、閑暇と普遍的教養の人間である。

富裕で、かつ仕事を愛すること。<sup>(5.1)</sup>」

## 5 偉人、聖者、英雄

前章最後にとりあげた断章の「富裕で、かつ仕事を愛すること」という言葉は、新たな問題を提起する。つまり、ダンディと仕事という問題である。というのも、ダンディと仕事は、そもそも両立しないはずであり、エミリアン・カラシュスが言うように、「何もしないこと、また何をするにも全き無関心をもって当たること、これがダンディズムの原理のひとつである<sup>(5.2)</sup>」からである。ボードレール自身、『赤裸の心』のなかで、「どんな職業のなかにもある卑しいもの。ダンディは何もしない<sup>(5.3)</sup>」と語っている。また、すでに引用した『現代生活の画家』の「ダンディ」の章の冒頭で述べている言葉、つまり、ダンディとは、「つまるところ優雅の実践以外に職業のない男」という言葉とも矛盾するように思われる。しかし、少なくともボードレールにおいては、これは矛盾でもなんでもないのである。まず、「仕事」と「職業」という二つの語は、ボードレールにとっては同義語ではないということを書いておかなければならない。「職業」とは、生活の糧を得、金をもうけるための手段としての労働の意味であり、ダンディズムの必須の条件である閑暇と両立しないばかりか、ダンディの貴族的精神から見れば、あまりにも卑俗な営みであり、ダンディとしての誇りは、そう

した労働に従事するのを許さないだろう。一方、「仕事」とは、生活のため、金銭のためといった卑しい目的を持たないある活動、ボードレールにおいては、特に、詩作の仕事、創作活動を指すものだが、もっと普遍的な意味にとれば、人間がこの世でなさねばならないある本質的な活動、いわば神から課せられた使命のごときものを指すとも言えるだろう。この意味での仕事は、たしかに齋藤磯雄の言うように、逆に「完璧なダンディイたらんがための一手段<sup>(54)</sup>」となりうる。しかし、ボードレールの言う仕事は、単にそれのみにはとどまらない。それは、ボードレールのダンディズムの、いわば完成のための必須の条件ともなるであろう。

そもそもボードレールにとっては、ダンディであることと、詩人であることとは矛盾しない。ボードレールのダンディズムの根底には、「美的に生きようという意志」があるということについては、すでに一章で述べた。美の追求という観点から見ると、ダンディも詩人も、ともに美を至上の目的とする人間であり、ただそのあらわれかたが違うというだけである。一方は作品のなかに、美を実現しようとし、他方は、日常生活に生きる自己のうちに美を実現しようとする。しかし、両者とも理想の美を実現しようとしていることに変わりはない。ボードレール自身、自己をダンディと規定しながら、そのために詩人であることを放棄しようとしたことはなかった。ボードレールは、ダンディでもあり、詩人でもあった。

エミリアン・カラシユスが、ダンディと労働について、「ダンディは労働に真の反逆感を抱いている。原罪ゆえに労働を課した神のおきてへの反逆<sup>(55)</sup>」と語っているが、これはおそらく正統のダンディズム（もしそのようなものがあるとするればの話であるが）については、間違いではないだろう。事実、あのブランメル自身、身だしなみ以外の人間の行為をとるにたらぬものとみなし、生涯その他のことを顧みなかったと言われる。しかし、もし、ここで言う「労働」が、人間の本質的な活動という意味での「仕事」をも含めたものであるなら、カラシユスの言葉は、ボードレールのダンディズムについては当たらないことになる。

ボードレールのダンディズムが、「仕事」の価値を積極的に肯定するのは、ボ

ードレールが「ダンディ」という人間をどのように規定しているか、ということと関わってくる。ダンディが、人間の邪悪な本性、動物的な本性を矯めて、精神性に生きようとする人間であり、真に人間的な誇りを抱いて、崇高で高貴たらしとする人間であるということについてはすでに述べた。それとともに、さらにボードレールは、ダンディを自己の理想を迫及し、たえず現在の自分を乗り越えて、最終的に、完全な人間、偉大な人間へと至ろうとする人間としてとらえているように思われる。ボードレールの友人であったシャルル・アスリノーの次のような証言が、これを裏づけてくれるだろう。

「このダンディという語を、ボードレールは独特な意味にとらえて、つまり、英雄的で崇高なという意味で、会話や、著作のなかで、しばしば使用した。ダンディとは、ボードレールの見方によれば、完全な人間、最高度に自立し、自己自身にしか属さず、世間を軽蔑しつつ世間を支配する人間であった。<sup>(56)</sup>」

ボードレールがダンディという語を、独特の意味で用いていたことが、この証言からうかがい知ることができる。ダンディ、「すぐれた人間」(l'homme supérieur)とは、一階梯上がった人間、自然的生を越えてより高い生に達した人間、アスリノーの証言にある「完全な人間」とは、その最終的、理想的な姿ととれるだろう。要するに、ダンディとはボードレールの掲げる理想の人間像であり、ボードレール自身、その理想に向かってたえず自己を高めようと努めるだろう。そして、「仕事」こそ、そのような人間へと至るための手段、そのような自己超越の、そのような自己完成のための手段となるのである。<sup>(57)</sup>

ボードレールの「仕事」の持つ意味について考える場合、『人工樂園』のなかの『アシーシュの詩』をとりあげるのが、最も適切であるだろう。<sup>(58)</sup>『アシーシュの詩』は、「真の恩寵」と名づける以外、何ひとつ納得できる原因を見出し得ない例外的な至福の状態に、時に、人が恵まれることがあるという事実から出発している。

「目を覚ますにあたって、精神が若々しく活力に充ちていると感じる日がある。眠りに封じられていたまぶたが開くか開かないうちに、外界が強い浮彫りと、明確な輪郭と、感嘆すべき色彩の豊かさとをともなって現れてくる。精神の世界は、新たな輝きに充ちた広大な眺望を繰り広げる。」



その時、人は平素の自分に優った自分を感じる。

「このような至福は、残念ながら稀にしか訪れず、しかも束の間のものでしかないとはいえ、それに恵まれた人間は、自分がいつもより芸術家であると同時に、いつもより正しい人間であると感じる。要するに自分がいつもより高貴であると感じるのである。<sup>(59)</sup>」

「いつもより芸術家」(plus artiste)「いつもより正しい人間」(plus juste)「いつもより高貴」(plus noble)といった言葉は、あたかもダンディについて語られているかのような感がある。というのも、こうした至福の状態は、ダンディズムと無縁とは言えないからである。ふつう、人々が、ただ受動的に、ひとつの恩寵のように恵まれるこのような境地こそ、ダンディが意志の力によって到達しようとするものなのである。

ボードレーは、さらにこの並はずれた精神状態を、「魔法の鏡」にたとえている。「それゆえわたしは、精神のこの異常な状態を、真の恩寵、魔法の鏡と考えたいのである。人はこの鏡の前に招かれて、そこに美化された自分、すなわち、かくあるべき、かくありうべき自分を見るのである。<sup>(60)</sup>」

ごく稀に、しかも束の間、訪れることのある、この楽園的な至福の状態は、人間の潜在的な可能性、埋もれている広大な能力の証拠となる。この「魔法の鏡」に招かれて、人はそこに平素とは違った自分を眺めるにせよ、それはやはり、紛れもなくかれ自身の姿であり、あえて言えば、十全なまでに拡大された姿、かくあるべき、かくありうべき姿なのである。ボードレーのいわゆるダンディが、最終的に目指すものとは、まさにこのようなものである。つまり、自己の全能力を開花させ、可能性のすべてを實現し、自己のなりうる最高の地点にまで自己を高めようとするわけである。したがって、ダンディの自己崇拜は、たえざる自己超越、自己創造、自己増大の試みと不可分のものとなる。『火箭』のなかの「自己崇拜」と題された断章は、このような観点から解釈することができるだろう。

「自己崇拜

性格の政治的調和

性格の諸能力との諧和

すべての能力を増大すること

すべての能力を保持すること<sup>(61)</sup>」

この断章を正しく理解するには、『アシーシュの詩』のなかで語られている「人工楽園」の探究者に言及する必要がある。『アシーシュの詩』では、続いて、前述の楽園的な至福の状態を、麻薬の力を借りて、人為的に任意に呼び起こそうとする人たちの試み、つまり、人工的に楽園を作りだそうとする人たちの試みが語られる。麻薬によって生みだされる不思議な効果や快樂、さらには陶酔から醒めたのちのかれらのあわれな様などである。そして、最後に、こうした試みを批判して、ボードレールはかれらの過誤を次のように明らかにする。

「事実、人間は、自らの生存の本源的な条件を乱し、自らの能力と、それらがそこで活動するべく定められた環境とのあいだの均衡を破り、ひとことで言えば、自らの運命を狂わせ、それにかえて新たな運命を持ちこむなどということは禁じられていて、これを犯せば、失墜と知的な死という罰を受けねばならない。<sup>(62)</sup>」

「人工楽園」の探究者は、人間に許された範囲を越えて、急激に、また過度に増大を試みたというのである。そのために、かれらはもって生まれた体質を損ない、人格の統一を乱し、「自らの能力と、それらがそこで活動するべく定められた環境とのあいだの均衡を破」るにいたったのである。そうではなく、ボードレールが推奨するのは、人間に許された範囲内で、つまり、人格の統一と調和、自己の能力と環境とのあいだの均衡を図りつつ、徐々に、しかし着実に増大を目指すことである。さきほどの『火箭』の断章は、このような自己増大を語るものであるだろう。

『アシーシュの詩』で、ボードレールは、最後に、「人間は薬剤や魔術に力を借りなければならぬほど、見捨てられてはいないし、それほど天国を得る誠実な手段に欠けてはいない」と述べる。そして、麻薬による偽りの快樂を追ったあげく、毒の作用に苦しむ人々の群れを眺めつつ語る、ある「詩人」の独白が、ひとつの結論のようにこの『アシーシュの詩』をしめくくる。

「断食もせず、祈りもせず、仕事による贖いを拒んだあれら不幸な者たちは、一気に超自然の存在にまで昇る手段を、黒魔術に求めている。魔術はかれらを

欺き、かれらのために偽りの幸福と、偽りの光明をかき立てる。一方、われわれ詩人にして哲学者は、たえまない仕事と観照とによって、自分たちの魂を再生させた。意志の不断の鍛練と、不変の高貴な意図とにより、自分たちのための真の美の庭園を作りあげた。信仰は山をも移すという言葉信じたわれわれは、神が許しを与えた唯一の奇跡をなすとげた！<sup>(63)</sup>

麻薬によって手に入れた楽園は、しょせん偽りの楽園でしかない。なにも麻薬に頼らずとも、人間は自ら楽園を、真の楽園、「真の美の庭園」を作り出すことができる。「たえまない仕事と観照」「意志の不断の鍛練と、不変の高貴な意図」とによって、自ら作りだすことが可能なのである。ということは、つまり、「かくあるべき、かくありうべき自分」にも、同じ手段によって到達することが可能であるということになる。さらにこれを言いかえるなら、自己の全能力を開花させ、可能性のすべてを実現し、自己のなりうる最高の地点にまで自己を高めようとする、ボードレールのいわゆるダンディの目標もまた、「仕事」により、「観照」により、「意志」の力により、また、「意図」の高貴さによって、実現可能ということになるだろう。

そして、その晩には、「ダンディ」は、最高度に進歩をとげた人間となるだろう。というのも、ボードレールは個人のうちにおける「進歩（真の進歩、つまり精神上の進歩）」は認めていたからである。また、「ダンディ」は、真の文明人ともなるだろう。というのも、「真の文明」が「原罪の痕跡を減少させるところにある」とすれば、ダンディは仕事によって、この原罪を贖うからである。また、「ダンディ」は悪魔的なものにたいする、神的なものの勝利を意味し、「神が許しを与えた唯一の奇跡」をなすとげることによって、より神に近い存在となるだろう。

『内面の日記』のなかに繰り返し現れる、仕事への、またすぐれた人間たることへの、決意、自己鞭撻、自己叱咤の言葉は、ボードレールがつねに理想を心に抱き、たえずそれに近づこうと努めていたことの、なによりの証拠である。

「毎日、わが義務をただちに果たし、かくして英雄となり、聖者となる力を与えたまえ。<sup>(64)</sup>」

この「わが義務」とは、もちろん仕事の意味である。仕事こそ、ボードレール

ルにとって、人間のなきねばならぬこと、いわば、神から課せられた義務といったものであるということについては、もはや言うまでもないだろう。「英雄」も「聖者」も、自然的な生を越えて、より高い生に到達した人間、人間存在における一段上の存在、それだけ神の高みに近づいた人間を指す。次の二つの断章における「最も偉大な人間」についても、同じことが言えるであろう。

「毎日、最も偉大な人間たらんと望むこと！」<sup>(65)</sup>

「最も偉大な人間たること。このことをたえず自らに言うこと。」<sup>(66)</sup>

これこそ、ボードレール言うところのダンディの、のみならず、ダンディ＝ボードレールの最終目標であり、生活信条と言えるだろう。とはいえ、ボードレールは、全人間のなかで「最も偉大な人間」たろうとしているわけではない。そのような、他者に優ったり、他者を支配したりといった欲求とは無縁である。ここで言う「最も偉大な人間」とは、自分に可能な最高の高みにまで達した人間という意味であり、これについては、次の断章の「自分自身にとって」という限定が、なによりも明白にもの語っているだろう。

「なによりもまず、自分自身にとって偉人であり、聖者であること。」<sup>(67)</sup>

「自分自身にとって、偉人であり聖者であること、これこそ唯一重要なこと  
がらである。」<sup>(68)</sup>

したがって、ボードレールにおいては、ダンディとは、最終的に「偉人」「聖者」「英雄」に重なりあうものであるとすることができる。そして、その時点から眺めるなら、こうした人間は、あえてダンディと呼ばれる必要もないほど、ある普遍性をそなえた人間となることだろう。ボードレールは、歴史的存在としてのダンディから出発して、ダンディをある普遍的な人間像にまで高めた。その点で、ボードレールのダンディズムは、一般的なダンディズム、正統のダンディズムからかなり逸脱しているようにも思われる。しかし、そこにこそボードレールのダンディズムの独自性があり、また、普遍性があるのである。

[注]

- (40) 『ダンディ 偉人 聖者(1)——ボードレールのダンディズムについて——』(松蔭女子学院大学・短期大学「研究紀要」第29号、1987年、所収) 参照。
- (41) O C. I, p.678
- (42) O C. II, p.709
- (43) O C. I, p.710
- (44) 齋藤磯雄『ボオドレエル研究』東京創元社、pp.68-69
- (45) O C. II, p.711
- (46) O C. II, p.691
- (47) O C. II, p.689
- (48) O C. II, p.22
- (49) O C. II, pp.610-611
- (50) O C. II, p.745
- (51) O C. I, p.689
- (52) Emilien Carassus, *Le Mythe du Dandy*, Armand Colin, 1971, p.77
- (53) O C. I, p.684
- (54) 齋藤磯雄、前掲書、p.100 齋藤磯雄もまた、ダンディが無為であるという命題と、ダンディが仕事を愛するという命題とが、必ずしも矛盾するものではないと明言している。ダンディが無為であるといっても、文字通り何もしないわけではない。功利的実用的な活動には従事しないというだけであり、むしろ普遍的教養を得るためには、こうした無為の時間こそ必要であるというのである。ボードレール自身もまた、次のように言っている。
- 「私がいくらか偉大になったのは、暇があったおかげである。  
それは私に大きな犠牲を払わせた。なぜなら、財産がなくて暇があると借金がふえ、借金がふえといろいろと侮辱を受けることも多くなるからである。  
しかしそれは私に大きな利益ももたらせた、感受性、瞑想、ダンディズムとディレッタンティズムの能力に関して。」(O C. I, p.697)
- (55) Emilien Carassus, op. cit., p.77
- (56) Jacques Crépet et Claude Pichois, *Baudelaire et Asselineau*, Nizet, 1953, p.99

60) このような自己超越の要素は、ボードレールのダンディズムに固有のものではない。一般に言われるダンディズムのなかにも見られるものである。ダンディの外見はただの見せかけではない。それはかれの人格そのものを反映してはいないとはいえ、やはりかれの人格と密接に結びついている。それはかれがそうありたいと望む人格、かれの理想とする人格を反映しているのである。ダンディとは、単なる自惚れ屋と違って、現在のあるがままの自己を誇り、それに満足を感じるような人間ではなく、自らそうありたいと望む自己、最良の自己、理想の自己を崇拜する人間なのである。

60) 『アシーシュの詩』を中心とした『人工樂園』の分析を、筆者はかつて行ったことがある（＜ボードレール 「賭」と「仕事」——『人工樂園』の思想——＞『リュテス』第10号、1978年、大阪市立大学フランス文学会、所収）。一部重複するが、あわせてお読みいただければ幸いである。

59) O C. I, p.401

60) O C. I, p.402

61) O C. I, p.658

62) O C. I, p.438

63) O C. I, p.441

64) O C. I, p.693

65) O C. I, p.702

66) O C. I, p.733

67) O C. I, p.691

68) O C. I, p.695